

# どう「応用」するのか —「現実の問題」の扱い方について—

土屋 貴志

(大阪市立大学 大学院文学研究科 哲学教室)

# 自己紹介

1961年生まれ

1990年3月 慶応義塾大学大学院文学研究科哲学専攻（倫理学分野）博士課程単位取得退学

1989年4月～1994年3月 杉野女子大学・横浜国立大学・千葉大学などで非常勤講師

1994年4月より 大阪市立大学文学部教員  
(現在准教授。哲学教室所属、倫理学担当)

人権問題研究センター兼任研究員

医学部・都市経営研究科・看護学研究科兼任

専門：倫理学、医療倫理学、人権論、道德教育論

## 2016.4.2 左側椎骨動脈解離による延髄梗塞を発症

→「ワレンベルク（延髄外側）症候群」4か月入院

### 現在の症状

- 左半身全体（顔から足先まで）に、力が出ない（右半身の力の半分→左半身が重く、左に傾く）、および、筋肉がひどく凝っている
- 右脚（腿から下）の痺れ、左手の痺れ、左顔面の痺れと痛み、左眼奥の痛み、右半身の痛覚と温度感覚がほとんどない、右手右腕の痺れ
- 複視（物がダブって見える）、左目の乱視（退院後にヘルペス？による左眼角膜潰瘍に。現在は潰瘍は治癒するが、角膜にくぼみが残る）
- 目を使うと症状が重くなる

# 発想の来歴

- 1995年2月「脳死・尊厳死 論争の交通整理役を果たす」『AERA MOOK 6 哲学がわかる。』朝日新聞社、78-81.
- 1996年3月「応用倫理学の必要性和留意点に関する覚書」『応用倫理学の新たな展開』（平成7年度科学研究費補助金・総合研究(A)研究成果報告書、研究代表者・佐藤康邦）28-32.
- 2004年3月「医療倫理学と保健医療社会学」『保健医療社会学論集』（日本保健医療社会学会）第14巻2号、1-8.
- 2010年1月9日「事例研究と倫理学」大阪市立大学哲学研究会第4回例会報告（大阪市立大学）
- 2011・2012年度 同志社大学文学部「倫理学特論」講義ノート  
<http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/user/tsuchiya/class/doshisha/index.html>
- 2013年10月6日「事例研究と倫理学」日本倫理学会第64回大会自由課題発表（愛媛大学）
- 2014年度～ 大阪市立大学文学部専門科目「倫理学概論」講義ノート [http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/user/tsuchiya/class/ethics\\_outline/outline-eth-sylbs.html](http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/user/tsuchiya/class/ethics_outline/outline-eth-sylbs.html)

# 本発表の目的

## 応用哲学についての哲学（メタ応用哲学）

といっても、文献研究の報告はできない...

- 「応用哲学」とは何か
- 私たちは「応用哲学」の名の下に何をやっているのか

について、みなさんが改めて振り返り、自覚するきっかけになれば。

→報告で終わらずに、できるだけ対話を交わす時間にしたい。

# 応用哲学とは？

- 「現実の問題を扱う哲学的探究」？

...対義語は？

- 「現実の問題を扱わない（現実の問題とは無縁な）哲学的探究」？

...そんなものがありうるか？

- 思想研究は、その思想家の「現実」と向き合っているのかも？

- 「現実の問題」とは？

- 「現実の問題ではないもの」とは？

- 「現実の問題」を扱いさえすればいいのか？

- 扱い方を問うべきでは？

# 医療社会学における「in」と「of」

Robert Straus, "The Nature and Status of Medical Sociology,"  
*American Sociological Review*, 22 (2), 1957, 200-204.

(1956年9月アメリカ社会学会大会での報告。110人の社会学者に対する調査結果)

- sociology of medicine : 医療の「組織的構造、役割関係、価値体系、儀礼、行動体系としての機能」等を、医療の外部から研究
  - 医学教育や臨床研究に近づきすぎるとidentityを失う危険がある
- sociology in medicine : 「様々な学問の概念や技法や専門家を統合する」共同の研究や教育
  - 同僚を研究すると良好な関係を失う危険がある

# 「現実の問題」の三つの扱い方

\* あくまで理念的な方向性として

(1) 「現実の問題」を哲学の資源を用いて  
「解決」しようとする

= 現実「のため (for)」の哲学的探究

(2) 「現実の問題」を理論的探究や教育の  
ための「ネタ」にする

= 現実「を用いた (with)」哲学的探究

(3) 「現実の問題」の意味や意義を問う

= 現実「について (of)」の哲学的探究



# 現実「のため (for)」の哲学的探究

- その問題に直面している「当事者」の「役に立つ」ために、哲学に蓄積されている資源 (resource) を活用する
- 目的はあくまでも「現実の問題の解決」
  - 哲学的探究は問題解決のための手段  
ないし道具 (tool)

# 現実「のため (for) 」の哲学的探究

医療倫理学（医学哲学）における例：

- 脳死状態患者からの臓器摘出を可能にするために人間の生命の価値について考察する
- 薬害を防止するために医薬品の審査が従うべき倫理的原理を明らかにする
- トリアージ（救命の優先順位づけ）を基礎づける原理を検討する

など

# 現実「を用いた（with）」哲学的探究

ないし、現実「による（by）」哲学的探究

- 「現実の問題」のほうを、哲学の理論を彫琢したり、思想研究を深めたり、哲学教育において「実例」を示すための資源として用いる
- 目的は、より包括的で首尾一貫した理論を練り上げたり、具体例を挙げて抽象的な言説の理解を促すこと
  - 「現実の問題」は理論的彫琢や理解進展のための「ネタ」として引き合いに出されるだけで、その解決は目指されていない

# 現実「を用いた（with）」哲学的探究

- 現実の問題「における（in）」哲学的探究は、実はこのタイプのものであることがしばしば例：
  - 人間の生命の価値について考察するために脳死状態について論じる
  - 何が適切な倫理的原理かを検討するために薬害の実例を引く
  - 功利主義の有用性を示すため（だけ）にトリアージを紹介する
- フィクショナルな例による思考実験（トロリー問題など）よりも実例に即したほうが「現実性」があり説得力が増す

# 現実「について (of)」の哲学的探究

- 「現実の問題」そのものを「哲学的」に分析する
  - その「現実の問題」とはいったいどういうことなのか
  - その問題がそのように提起されているのはなぜなのか
- その「現実の問題」をいったん棚上げし対象化し、より適切な問題の捉え方がないか（「真の問題」は何なのか）を追求する
- 「ネタ」として利用はしないが、かといって必ずしも問題の解決を（直接に）目指すわけでもない

# 現実「について (of)」の哲学的探究

## 「現実の問題」そのものについての哲学的探究

例：

- なぜ脳死状態が人の死であるかどうかの問題にされるのか（→心臓移植の許容）
- トリアージが必要になる条件とは何か（→災害における資源の希少など）
- 薬害はなぜ繰り返り起こるのか（→製薬企業にコントロールされる医学界や薬事行政）
- それらについて考えることにどんな意義があるか

# 現実「について (of) 」の考察の重要性

- 「現実の問題」とは、実際に起こった出来事や問題になっている事柄をそっくりそのまま丸ごと記述したものではありえない（出来事や事柄のあらゆる細部をそのまま言語化して記述することなど不可能）
- それは記述者の視点から、必要と思われる側面を取り出して、自分にも他者にも理解できるように構成された「はなし」（語りnarrative、事例case、物語story、歴史history）
- 別の視点と必要性から構成し直される可能性がつねに開かれている

# 振り返ってみよう

- 自分が行っている応用哲学的探究は、これら三つの方向性のうち、どれを志向しているか？ どれが一番近いのか？
- そのことの意義は何なのか？ なぜ自分はその応用哲学的探究を行っているのか？
- そもそも一般に、応用哲学的探究を行うことの意義は何なのか？

応用哲学的探究でない研究（＝思想研究？）の意義は何なのか？



...と言ってはみたけれど...

- この三つの方向性は、くっきりと別々のものなのか？
- もしそうでないなら、くっきりと別々のものとして描くことの意義はどこにあるか？

...以下、いくつか気づいた問題

# 「現実の問題」と「理論」

- 「現実の問題」：個別の、一度きりの、出来事？

...しかし、それを直示でない言葉でとらえたたん、その言葉によって表現される個別の出来事すべて（個別の出来事の集合）を指すことになる

= 言葉による表現は「普遍性」をもってしまう

- 「理論」：複数の個別の出来事にあてはまる「普遍性をもつ」言説

...だとしたら、どんな個別の出来事であっても、それに関する言説（言葉で表現されたこと）は、多かれ少なかれ、すべて「理論」であることになる

→ 「個と普遍」という（伝統的）問題へ

# 現実「のため (for) 」の哲学的探究の目的

「現実の問題」を「解決」することの目的は？

- 当事者が「生きやすくする」こと？
  - = 生きている（生きていく）際に遭遇する困難を少なくすること
  - = 生きていく（人生、生活）上での苦痛を減らすこと
- 当事者の利益を図る = 「業務（診療〔診断と治療〕、教育など）」との類比

# 現実「のため (for) 」の哲学的探究の目的

- どうすれば「現実の問題」は「解決」できるのか？
- 「による (with) 」探究によって得られる「より包括的で首尾一貫した理論」や「抽象的な言説」、あるいは「について (of) 」の探究によって得られる「現実の問題の分析」がなければ、「現実の問題」は「解決」できないのでは？

# 現実「を用いた（with）」哲学的探究の目的

「より包括的で首尾一貫した理論を練り上げ」たり、「抽象的な言説の理解を促す」ことの目的は？

- 「世界」（ミクロおよびマクロな、自分が置かれている状況）を言葉によって把握すること  
= 世界の「理解」。自分が置かれている状況がわかること

...何のために？

- 「研究」？（同様の立場に置かれた人や人類の利益を図るが、対象者本人の利益には必ずしもつながらない）
- わかること自体が目的？
  - 「知的欲求を満足させる」と言ってみてもいいが、「満足感」「充足感」ではない
  - = 知的なエネルギー（活動）としての幸福

現実「について (of) 」の哲学的探究の目的

「わかる」ことが目的か？

だとしたら、現実「による (with) 」哲学的探究と、目的は同じなのか？

(研究？知的活動としての幸福？)

- メタレベルの「理解」、「理解についての理解」？
- 「現実の問題」を「ネタ (材料、道具、手段) としては用いていない」と言い切れるか？